

イスラエルの人々⑥

□イスラエルの人々の信仰の手本

雲の柱が天幕の入り口に立つのを見ると、民はみな立ち上がって、それぞれ自分の天幕の入り口で伏し拝んだ。主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。モーセが宿営に帰るとき、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が天幕から離れないでいた。(出33:10~11)

□これまでの振り返り

1. アブラハム契約・・・神は、全人類の中から一人の人、アブラハムを召し出し、彼に3つの約束を与えた。**土地の約束、子孫の約束、祝福の約束**である。神はその約束を確かなものとして、アブラハムと契約を結ばれた。
 - (1) 土地の約束と子孫の約束を通してアブラハムは**復活信仰**に導かれた。
 - (2) 祝福の約束は、アブラハムの子孫（メシア）によって全人類に神の祝福がおよぶという約束。その祝福の中核は「復活」である。
2. アブラハム契約は、アブラハムから、子のイサク、孫のヤコブへと継承された。ヤコブの子孫であるイスラエルの人々は、エジプトで増えて一つの民族としての規模にまでなったが、エジプト王に仕える奴隷の民となってしまった。神はアブラハム契約に基づき、モーセを遣わして人々をエジプトから救出した。
3. イスラエルの人々① 紅海を渡る・・・イスラエルの人々は、神を信頼する信仰によって、右と左に水の壁を見ながら、紅海を渡った。
4. イスラエルの人々② 律法授与の準備・・・**マラ→エリム→シンの荒野**。エジプトを出てから、ちょうど1か月。手持ちの食糧が尽きて、民はモーセに**不平を言った**。
 - (1) その日の夕方、うずらが飛んで来て宿営をおおった。
 - (2) 朝になると、宿営の周り一面に露が降りた。その一面の露が消えると、地面の上には薄く細かいものがあつた。民は、それを「マナ」と名づけた。
 - (3) 主は、六日間マナを降らせ、六日目には二日分のマナを与えて**七日目を休ませる、という生活ルールを**、イスラエルの民に体験させた。これは、安息日の規定をもつ律法を授与するための準備でもあつた。
5. イスラエルの人々③ 水の供給と襲撃者との戦い
 - (1) **シンの荒野→レフィディム**。そこには民の飲み水がなかつた。民はモーセと争い、「われわれに飲む水を与えよ」と言った。主はモーセに言われた。「民の前

を通り、イスラエルの長老たちを何人か連れて、あなたがナイル川を打ったあの杖を手に取り、そして行け。さあ、わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。岩から水が出て、民はそれを飲む。」モーセはその通りにした。このホレブの岩は、第二位格の神、受肉前のキリストであった。以降、この岩が民についてきて、荒野で宿営する民に飲み水を供給。

- (2) アマレク人がイスラエルの民を襲撃した。襲撃者との戦いを通して主は3つのことをイスラエルに教えた。①主はイスラエルと共におられる、②戦いは人の力によらず、神の助けによる、③モーセは神が選んだ指導者である

6. イスラエルの人々④ 律法授与（シナイ契約、モーセの律法）

レフィディムを旅立って、第三の月の第一日にシナイの荒野に入った。三日目に主は、シナイ山に降りて来られて主の栄光を民に見せ、民は神への正しい恐れを示した。そして、民に直接、安息日の規定を含む十戒を聞かせ、さらにモーセを通して十戒以外のもろもろの律法の定めを聞かせ、モーセにそれらを書かせ、翌朝、あらためてそれを民の前で読ませ、契約を締結した。そして、主はシナイ山の中腹に長老 70人を招いて、契約の食事までしてくださった。

7. イスラエルの人々⑤ 金の子牛事件

契約の食事の後、モーセだけシナイ山の中腹から上に登って行った。40日間山にいて、主から、幕屋の製作について詳しい指示を受け、安息日の規定の目的と罰則についても命令を受け、そして十戒を記した石の板2枚を授かった。その間、ふもとでは金の子牛事件を起していた。そのことをモーセは山の上で主から聞き、主がイスラエルを滅ぼし、あらためてモーセから新しい民を起こすと言われたことに対し、アブラハム契約の約束に基づいてとりなしをした。

□イスラエルの人々の信仰⑥ 40日間のとりなし

1. モーセは下山して、事件に対処（出 32：15～29）

- (1) モーセは下山・・・宿営に近づくと金の子牛像のまわりで民が踊っているのが見えた。モーセは、十戒が記されていた石の板2枚を山のふもとで砕いた。（出 32：15～19）

15～19節 モーセは向きを変え、山から下りた。彼の手には二枚のさとの板があった。板は両面に、すなわち表と裏に書かれていた。その板は神の作であった。その筆跡は神の筆跡で、その板に刻まれていた。

ヨシュアは民の叫ぶ大声を聞いて、モーセに言った。「宿営の中に戦の声があります。」モーセは言った。「あれは勝利を叫ぶ声でも敗北を嘆く声でもない。私が聞くのは歌いさわぐ声である。」

宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして、手にしていたあの板を投げ捨て、それらを山のふもとで砕いた。

(2) 金の子牛像を処分 (出 32:20)

20節 それから、彼らが造った子牛を取って火で焼き、さらにそれを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエルの子らに飲ませた。

- このときモーセ自身は宿営の中には入っていないと思われる。26節に「宿営の入り口に立って」とあるからである。従者ヨシュアを行かせて、子牛像をもって来させたのであろう。
- 「水の上にまき散らし、イスラエルの子らに飲ませた」とはどういうことか？ この事件から40年後、モーセは次世代のイスラエルに向かって、次のように回顧している。「私はあなたがたの罪、あなたがたが造ったその子牛を取って火で焼き、打ち砕き、ちりになるまでよくすりつぶした。そして私はそのちりを、山から流れ下る川に投げ捨てた。」(申9:21) よって、「水」とは、神の山ホレブから流れ下り、宿営地の中を流れていた川の水。イスラエルの民はこの水を飲んでいて。

(3) アロンに問う (出 32:21~24)・・・モーセがアロンを呼び出して経緯を尋ねると、アロンは自分が子牛像を铸造したとは認めず、「金を火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです」(24節)と偽りを言って責任回避した。

- アロンは、モーセが山に登って留守の間は、モーセの代理として民を指導する役割を与えられていた(出 24:14)。その役割を果たさなかったばかりか、偽りまで言ってしまった。35節には、「それはアロンが造ったのであった」と記されている。モーセは申命記で次のように回顧している。「主はアロンに向かって激しく怒り、彼を滅ぼそうとされたが、そのとき私はアロンのためにもとりなしをした。」(申命記9:20)

(4) 宿営内の粛清・・・モーセは、民が乱れていて、アロンが彼らを放っていたので、敵の笑いものになっているのを見た。そこでモーセは宿営の入口に立って、「だれでも主につく者は私のところに来なさい」と言った。すると、レビ族がみな彼のところに集まった。レビ族は、腰に剣を帯びて宿営の中を行き巡り、(乱れ戯れている)民を殺した。その日、民のうちの約三千人が倒れた(出 32:25~28)

(5) レビ族への祝福 (出 32:29)

29節 モーセは言った。「あなたがたは各自、その子、その兄弟に逆らっても、今日、主に身を献げた。主があなたがたに、今日、祝福を与えてくださるように。」

- 与えられた祝福は・・・主はレビ部族を選り分けて、主の契約の箱を運び、主の前に立って仕え、また御名によって祝福するようにされた。それゆえ、レビには兄弟たちと同じようには相続地が割り当てられなかった。主がレビ部族へのゆずり（相続）なのである。(申 10:8~9)

2. モーセ、40日間のとりなし

(1) 翌日、モーセは山に登り (5回目)、民のためにとりなす (出 32:30~33:6)

30~32節 翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。だから今、私は主のところへ上って行く。もしかすると、あなたがたの罪のために宥めをすることができるかもしれない。」

そこで、モーセは主のところに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」(出 32:30~32)

- あなたがお書きになった書物・・・「いのちの書」(詩 69:28a)とも呼ばれる書物。人が生まれるとその名が記され、不信仰のまま死ぬとその名が消される。いのちの書に名が残っていなければ、その人は義人の復活に与かることはなく、約束の地に立つことはできない。
- モーセは自分が身代わりになって罪人に数えられるので、その代わりにイスラエルの民が今回犯した罪については赦してもらいたいと願い出た。

33~34節 主はモーセに言われた。「わたしの前に罪ある者はだれであれ、わたしの書物から消し去る。しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に民を導け。見よ、わたしの使いがあなたの前を行く。だが、わたしが報いる日に、わたしは彼らの上にその罪の報いをする。」

- 主はモーセの身代わりの申し出を却下。しかし、モーセのとりなしを受け入れ、民を約束の地に導けと命じた。そして「わたしの使い」をモーセの前を行かせるとのこと。「わたしの使い」、すなわち主の使い、第二位格の神であるが、モーセはそれを知らない(出 33:12「だれを私と一緒に遣わすかを知らせてくださいません」)

33章1～3節 主はモーセに言われた。「あなたも、あなたがエジプトの地から連れ上った民も、ここから上って行って、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓って、『これをあなたの子孫に与える』と言った地に行け。わたしはあなたがたの前に一人の使いを遣わし、カナン人、アモリ人、ヒッタイト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を追い払い、乳と蜜の流れる地にあなたがたを行かせる。しかし、わたしは、あなたがたのただ中であっては上らない。あなたがたはうなじを固くする民なので、わたしが途中であなたがたを絶ち滅ぼしてしまわないようにするためだ。」

- (2) モーセは下山し、民に主のことばを伝える（出33：4～6）

4～6節 民はこの悪い知らせを聞いて嘆き悲しみ、一人も飾り物を身に着けるものはいなかった。主はモーセに次のように命じておられた。「イスラエルの子らに言え。『あなたがたは、うなじを固くする民だ。一時でも、あなたがたのただ中であって上って行こうものなら、わたしはあなたがたを絶ち滅ぼしてしまうだろう。今、飾り物を身から取り外しなさい。そうすれば、あなたがたのために何をするべきかを考えよう。』」それでイスラエルの子らは、ホレブの山以後、自分の飾り物を外した。

- (3) 事件に対処した日から数えて40日間、モーセのとりなしは続いた。

申命記9：18 それから私は、前のように四十日四十夜、主の前にひれ伏して、パンも食べず水も飲まなかった。あなたがたが罪ある者となって、主の目に悪であることを行い、御怒りを引き起こした、そのすべての罪のゆえであった。

- (4) 会見の天幕（出33：7～11）・・・宿営の外に「会見の天幕」を張った。モーセがその天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入り口に立った。

10～11節 雲の柱が天幕の入り口に立つのを見ると、民はみな立ち上がって、それぞれ自分の天幕の入り口で伏し拝んだ。主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。モーセが宿営に帰るとき、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が天幕から離れないでいた。

- (5) 40日間のとりなしの結果（出33：12～34：3）

34：1～2節 主はモーセに言われた。「前のものと同じような二枚の石の板を切り取れ。わたしはその石の板の上に、あなたが砕いたこの前の石の板にあった、あのことばを書き記す。朝までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。」

□次回は、「モーセ再び40日間、山に。主がイスラエルと再契約してくださる」